

活動成果報告書

平成26年度（第18回）「チョダ地域保健推進賞」

活動テーマ

小さく生まれた赤ちゃんの会 「ひまわりの会」
～早産・低出生体重児を育てる母親をつなぐ支援～

応募グループ名称及び氏名（グループの場合は代表者名）

荒川区保健所 健康推進課 保健相談担当
代表者：伊藤 ふみ

勤務先：荒川区保健所

所 属：健康推進課保健相談担当

所在地：〒116-8507

東京都荒川区荒川2-11-1 がん予防健康づくりセンター

TEL：03-3802-3111

FAX：03-3806-0364

E-Mail：fumi.itou@city.arakawa.tokyo.jp



◇活動方針

晩婚化や周産期医療の進歩に伴い、近年早産児・低出生体重児の割合が増加している。その予後に関しては脳性まひなどの肢体不自由、視力・聴力障害、広汎性発達障害などの頻度が一般より高く、育児不安や児童虐待の発生要因となっている。また、早産児・低出生体重児を持つ母親は「小さく生まれたから、他の親子と交流しにくい」「感染症が心配で出かけにくい」などの理由から、外出困難となり、地域からの孤立を招きやすい実態がある。そのため、荒川区では出生体重が2000g未満の赤ちゃんと母親を対象とした「ひまわりの会」を月に1回定期開催し、母親たちが安心して交流や情報交換、相談を行える場を提供している。ひまわりの会での温かな交流を通して、孤立しがちな母親たちが自信を持って地域に足を踏み出せる後押しとなることを目的に活動を行っている。

活動成果報告書

◇活動内容とその成果

・ 住民の声から誕生

ひまわりの会は平成 22 年 1 月、「小さく生まれた子どもの集まりがほしい」という 1 人の住民の声から発足した。

・ 赤ちゃんの保育

平成 22 年 4 月よりボランティアによる赤ちゃんの保育を導入した。可能な限り母子分離をはかり、母親同士がより活発に交流できるように働きかけている。現在は、ボランティアではなく保育士が赤ちゃんの保育を行っている。交流会の中で保育士が遊びやわらべうたを紹介するコーナーを設け、長期母子分離が続いた母と子の愛着形成に向けて積極的な働きかけを行っている。

・ 保健師の関わり

保健師はファシリテーターや母親間の仲介役として、交流を促す役割を果たす。また、母親だけでは解決できない育児相談にその場で対応する。保健師が入らずとも活発に交流しているときは、無理に介入はせずに、母親たちが自由に交流できるように見守り、母親たちの主体的な会になるよう意図的に働きかけている。また、交流会には地区担当の保健師が積極的に参加し、終了後に面接を行うことで、個別の支援につなげている。

・ 講座の開催

年 2 回講座を開催している。講師料の予算がない中で、これまで保健所スタッフや区内療育機関・消防署の協力を得て救急救命や発達支援（発達を促す遊びや体操）、離乳食、歯の手入れについてなど、母親たちのニーズに合わせた様々な講座を開催してきた。講座は毎回好評で、普段気になっていても聞けないこと、母親同士では解決できないことを専門家に聞ける貴重な問題解決の場となっている。

・ 赤ちゃん通信の発行

ひまわりの会の通信を年 2 回（A 4、1 ページ）発行している。ひまわりの会の活動をより多くの人々に知ってもらえるよう、通信には活動の様子や講座の内容を掲載している。はじめて通信が発行された平成 22 年度当初は区内の公共施設のみでの配布であったが、現在は区外の療育機関や医療機関に依頼し、通信を置くことが可能になった。現在の配布場所は、計 32 か所に上り、通信を見た他市区町村の母親からの参加希望も多く寄せられている。自治体が主体となった交流会の必要性の高さを伺うことができる。

・ 参加者の反応

ひまわりの会に参加することで、安心して交流や相談ができる場ができたという声が多く寄せられている。また、少し大きくなった他児の姿を見て、我が子の成長に見通しを持てる機会となっている。このことから、ひまわりの会は早産児・低出生体重児を育てる母親たちが自信を獲得し、地域のコミュニティーに一歩足を踏み出すきっかけの場となっている。

《現在までの実績》

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度
参加親子（延組数）	86 組	52 組	59 組	62 組
参加人数（延人数）	164 人	107 人	121 人	127 人

活動成果報告書

◇今後の計画

- ① 助成金をもとに、チラシ・ポスター・冊子を作成し、ひまわりの会について広く情報発信していく。通信・チラシ・ポスターの設置に協力してもらえる医療機関もさらに拡大していく。また、通信をさらに充実させ発行回数や枚数を増やしていく（年3回）。
- ② ひまわりの会の卒業生を集め同窓会を開催する。小さな赤ちゃんを生んだばかりの母親と、先輩の母親が交流し、希望や成長の見通しを持てるよう働きかけていく。
- ③ 助成金を講師料や会場使用料にあて、講座の内容を充実させていく。また、講座の開催回数も増やしていく。